

大会長講演

医療情報学の再発見 ～研究の多様化の中で今なすべきことは？～

赤澤 宏平

新潟大学医歯学総合病院 医療情報部

日本における医療情報学は体系が整ってから 50 年くらいしか経っておらず、まだ新しい学問分野であるといえよう。医療情報学は他の学問領域との連携を模索しながら医療情報の利用価値を高めることを追究する学問である。また、実用的に優れた技術・デバイス・モデルを開発することで医療の質の向上に貢献する学問でもある。

今回、演者は本春季学術集会の大会長を拝命したが、過去を振り返ると医療情報学分野に携わって 33 年が経過していることに気付かされた。この間、本学会ではさまざまな発表カテゴリーが出現した。あるカテゴリーは演題数が増え続け現在も新たな知見が発表され続けている。またあるカテゴリーはいくつかのカテゴリーに分岐して別の方向に発展したものもある。また別なカテゴリーでは発表数の減少とともにいくつかのカテゴリーが併合されたものもある。こういう研究分野の出現・分岐・結合が繰り返されてきたのが本学会のひとつの特色と言える。

1980 年代はオーダリング機能を搭載した病院情報システムの黎明期であり、それらの機能や運用の事例が盛んに議論された。また、1990 年代になると、ネットワークやセキュリティに関する技術開発の発表が多数なされたが、日進月歩の進展が現在にまで至っている。2000 年代に入ると、集積された医療データの活用事例や分析手法などの幅広い発表が行われてきた。診療圏分析、経営分析、画像解析、シミュレーション、統計解析、遺伝情報解析、情報管理、教育など、医療情報学の独自の進展はもちろんのこと、他分野との学際的な研究も顕著になってきた時期でもある。

本講演では、演者自身の拙い研究業績の中からそれぞれの時代の研究分野を取り上げ、医療情報学の研究分野の変遷をたどってみる。また、演者の目から見た現在の医療情報学の研究内容と方向性を少しだけまとめてみたい。30 年前に比べると医療情報学としての研究分野の幅が広がり、我々研究者がそれらにどのようにかかわっていくべきかを考察する。